
永遠の冬

M. C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の冬

【Nコード】

N8494G

【作者名】

M・C

【あらすじ】

粉雪の舞う寒い冬の日。一人の男が新潟県にある柏崎駅のホームに降り立った。男はある女の所へと向かう……

わたしは柏崎で電車を降りた。改札を抜け駅構内を出る。粉雪が舞っている。わたしはタクシーに乗り込んだ。

「橋場町へ」

車が動き出す。窓の外を懐かしい風景が流れていった。

「今日は寒いですね」

運転手が言った。

わたしは窓外の白い街並みを眺めながら返した。

「ええ。東京では考えられないくらいの寒さですね」

「東京からお越しで？」

「そうです」

「何か用事でも？」

「人に会うんです」

「へえ」

それきり話は途絶えた。

車が橋場団地に差し掛かる。

「お客さん、橋場町に着きましたけど。どのへんですか」

「次の角を右に曲がってください」

車がわたしの言った通りに曲がった。

「二つ先の角を左折してすぐの所で止めてください」

車が停止した。わたしは料金を払うと道路に降り立った。タクシー

が去っていく。

目の前の大きな家のブザーを鳴らした。

しばらくして背の低い女性が現れた。白磁のような肌をしたかなり美しい女だ。

「どなた様でしょうか」

女にはわたしが分からないようだった。無理もない。もう二十年も経つのだ。

「あなたは佐竹由加里さんですか」

一応確認すると、女は顔に軽い警戒心を浮かべながらも頷いた。

「上がらせてもらえませんか」

わたしは言った。

女は一層警戒感を強めたようだ。

「失礼ですけど、あなたは……」

わたしは女にのしかかるようにして詰め寄った。相手が後ろへ後ずさる。わたしはさらに前進し、家の中に入った。後ろ手にドアを閉める。

女が心持ち震えた声で言った。

「何をするんですか」

わたしはコートのポケットからナイフを取り、刃を出した。

「わたしはあなたを殺すために来ました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8494g/>

永遠の冬

2010年12月8日06時45分発行